

JFA news

9 NO.473
2023.
月刊 情報号

特集

指導者として学ぶ

反町康治 JFA技術委員長

JFAが進める指導者養成～西川誠太 JFA指導者養成ダイレクター

指導者に聞く～松井大輔、辻俊行、佐藤一恵



サッカーファミリーの取り組み
～リスペクトアウォーズ2022より

対馬市サッカー協会

離島でも存続可能な
サッカー環境を

対馬市で実施したフェスティバル、「しまサカ」。対馬市FAと長崎県FAが協働して行い、対馬市の中高生が参加した

子どもたちのために
サッカー協会を設立

長崎県対馬は九州本土と朝鮮半島の間に位置し、約2万8,000人(2023年7月時点)が暮らす離島だ。その島の中心にあたる対馬市はおよそ10年、少年少女のためのサッカー環境整備に取り組んでいる。

島にあった唯一のU-12年代のチームは、かつて長崎県大村市サッカー協会(FA)の理解と手厚いサポートの下、同市FAに所属して活動を続けていた。しかし、対外試合は年にわずか2~3回。試合のときは飛行機で大村市に向かうが、1日に2試合を組むのがやっとだった。1度の遠征にかかる交通費を考えても、子どもたちがサッカーを続けることに難色を示す保護者も少なくなかった。

こうした課題を克服すべく、「未経験だけど、サッカーが好きで仕方なかった」という吉田和也さん(現、対馬市FA理事長)と小松和博さん(現、同市FA事務局長)が中心となってサッカー協会設立を進めていく。吉田さんらの「島の子どもたちにもっと自由にサッカーをさせてあげたい」という思いに長崎県FAや財部能成対馬市市長(当時)も応え、2013年に対馬市FAが創設された。

地元FAを設立して以来、吉田さんは「始めるより、続ける方が大変」と感じるが多かったという。そんな中でも、困ったときは長崎県FAの積極的なサポートに支えられた。キッズフェスティバルを実施する際は、長崎県FAが運営費用を負担し、指導者も派遣する(※)。「サッカー界最大の長所は横のつながりだと感じた」と小松さん。FAを設立する前は一つだけだったU-12年代のチームが4チームに増え、現在は島内で試合を組んだり、県大会の予選を開催したりするなど、機会創出につながっている。

※離島支援事業：JFA、47FA一括補助金の一部として助成される地域特性特別補助を活用し、離島の特性や特徴を生かす事業を実施。23年も「対馬しまサカ」というフェスティバルを開催した。

島内で指導者を養成し
普及につなげていく

今年、対馬協会は設立11年目を迎える。そんな中で吉田さんと小松さんが懸念しているのが、対馬サッカーの将来を担う指導者が少ないということ。これまで、フェスティバルなどを行うたびに優秀な指導者が対馬を訪れた。離島支援事業では「ぜひ行きたい」と言って対馬での指導を買って出してくれる指導者もいれば、九州本土に戻ってからまたたびたび対馬を訪れてくれる指導者もいた。「島外の指導者に助けられている」と吉田さんは話す。自分たちでアクションを起こす重要性も感じていた。

対馬市FAはこの秋、C級コーチ養成講習会の開催を予定している。講習会を行うためには最低でも12人の参加者が必要になる。定員に満たず、実施できなかったこともあるだけに、「今回は4種のチームの指導者が声を掛け合っ、何とか自分たちで開催にこぎつけるんだという姿勢を感じる」と小松さんは語る。

今、携わっている指導者に指導を続けてもらうことも重要なテーマの一つだ。小松さんはかつて4種委員会の委員長を務めていたが、仕事の都合で継続することが難しくなり、現在は各チームで分担して4種年代の試合を運営。それぞれがレベルアップを図る中、指導者たちも声を掛け合っ、リーグ戦を行うなど、リスペクトの精神を大切にしながらサッカー環境の整備に奔走している。

今後に向けた施策は尽きない。対馬市FA設立11年目の積み上げが認められ、今年から対馬市が、「市民がスポーツに親しみ、健康で活気あふれる持続可能な島づくり」を目的に、V・ファーレン長崎との連携事業に取り組むことになった。「対馬にサッカーを根づかせるチャンス」(吉田さん)を存分に生かし、サッカーが続くサイクルを生み出すためのアイデアを練っている。